

# はり ま たん けん 播 磨 探 検

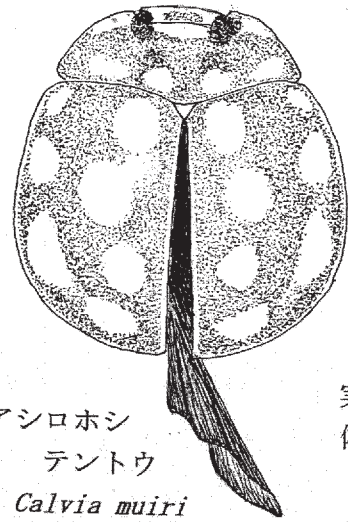
2017. 7. 31 275号

文 赤松弘一

6月の中旬ごろ(だったと思う)、我家の庭のレモンの樹(だったかな)に小さなテントウムシがいたと思うのだが。その時のことをいつも使っている野帳に記録しなかったので、今ではハナハダアイマイである。記録がなく、記憶にないが(このセリフ最近よく聞く)、現実にテントウムシはフィルムケースに入っている机の上にあるので、私が捕獲したことは事実である。採取した時は「たしか、植物の葉に付く菌類を食べるムーアなんとかテントウムシではなかったかな」と思いながら、たまに見かける種類なので、捕獲したまま忘れてしまっていたのだ(最近よくある)。

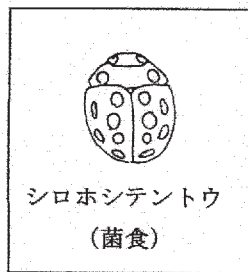
ある日、本棚の上のフィルムケースを見つけて、「何が入ってるのか?」と開けてみたら、すっかり標本になってしまったそいつが現れたのである。調べてみると正式な名前はムーアシロホシテントウムシであった。このテントウムシはてっきり菌類(ウリ科の葉に付く白いカビ・ウドンコ病の菌など)を食べる益虫だと思い込んでいた。手持ちの図鑑にはそのように記載したものと、アブラムシを捕食すると記載したものがある。ネットの情報の中に、『菌類を食べるのはテントウムシ科のカビクイテントウムシ族に属するクモガタテントウムシ、キイロテントウムシ、シロホシテントウムシであり、ムーアシロホシテントウムシはシロホシテントウムシによく似ているので菌類を食すると間違えられているが、テントウムシ科の中で捕食性のテントウムシ族に属し、幼虫も成虫もアブラムシを食う肉食である』というものがあつた。菌類を食べるにしてもアブラムシを食べるにしても、農業にとってはありがたい益虫である(この益虫とか害虫という分け方も人間本位の勝手な分類である)。

次にこのテントウムシの名前、「ムーアシロホシテントウムシ」が何に由来するのか気になった。ムーアとは漢字で書けないので外国の名前だろう。この虫の命名者の昆虫学者がムーア博士(だれ?)だったのか、ムーア地方(どこだ?)に多く見られたのか、ムーアの樹(どんな樹?)に多く見つかるのか、どうなのだろう。他にも日本語ではないと思われる名前がついている昆虫には、ベダリアテントウムシ、モートンイトトンボ、ルイスジガバチ、ラミーカミキリなどたくさんある。モートンはイギリスのトンボ学者の Kenneth J Morton (1858~1940) にちなんでいる。ルイスは明治初期に日本を訪れたイギリス茶の貿易商で、昆虫学者のジョージ・ルイス氏に由来する。ラミーはこのカミキリの食樹がラミーという樹で、この樹と共に明治の初めにヨーロッパから日本に持ち込まれたらしい。ベダリアテントウムシはミカン類の大害虫であるイセリアカイガラムシを退治するため、その天敵としてオーストラリアから日本に移入されたので、もともと現地での英語名の *vedalia ladybird* に由来している。なるほど納得である。やはりムーアだけはよくわからない。だれかすっきりさせてほしい...



ムーアシロホシ  
テントウムシ  
学名 *Calvia muiri*  
(テントウムシ科)

実物大  
体長 4.2 mm



シロホシテントウムシ  
(菌食)

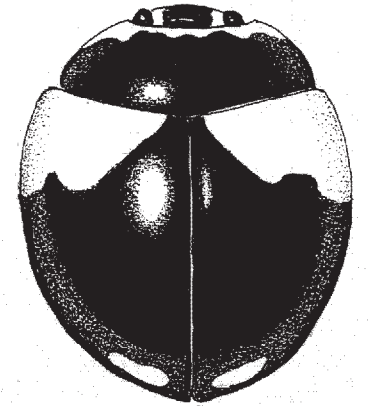
## 生きた宝石を見逃すな! Only One のデザインが 10000 種

ムーアシロホシテントウムシと同時に採取した小型のテントウムシがいた(やはり同じレモンの樹だったと思う)。3mm もない黒い粒としか認識できず、どうせ名前は判明しないと思って放置していたが、ムーアの方を調べるついでにルーペで観察すると、上翅の付け根に黄色い紋があるのがわかった。この紋を手掛かりに図鑑を調べていくと「日本の昆虫 1400 ②」(文一総合出版)に記載があつた。名前はマクガタテントウムシである。それによれば北海道・本州・四国に産するが、地域によってはかなり希少なテントウムシで、九州では未発見、本州も島根県までしか報告がない。もともと北方系の種らしい。滋賀県では最近見つかったのが県内 2 例目というから驚く。兵庫県での個体数や分布状況はどうなのだろうか。成虫・幼虫ともにアブラムシを食するらしいが、成虫は花粉を食べるといふ報告もあるようだ。このテントウムシはなぜか河川敷などの荒れ地で見つかることが多いという。河川敷に特有な植物の花粉を食うためなのだろうか。またそんなテントウムシがなぜ我が家にいたのかについても謎である。この夏の間に加古川の河川敷で探してみよう。

さて、マクガタテントウムシの名前の由来である。マクガタとは何なのか、残念ながら図鑑等の資料を調べたが分からない。例によってネットに頼ることとなったが、それによればマクは幕であり、この虫の上翅の付け根の黄色い紋が、「幕を引いた様子に似ているから」という。ちょっとわかりにくいですが、おそらく神社の拝殿に下げられた幔幕を真ん中で絞ったような形に見えることから名付けられたのではないだろうか。しかしその虫の様子を想像しにくい名前である。まあムーアよりましかな。

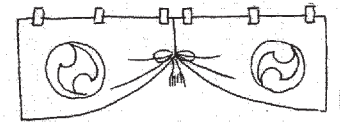
テントウムシと言えばナナホシテントウムシがごく身近である。これは体長 7mm 前後だが、これでもテントウムシの仲間の中ではかなり大きい方なのだ。最大はオオテントウムシ 12mm だが、まだ出会ったことがない。大半は 5mm 前後で、3mm 程度のものも多い。ほとんど目に触れず、見逃してしまうような微細な昆虫なのである。

日本では約 180 種のテントウムシが確認されているが、これは一つの科としては少ない方である。例えばオサムシ科は 1300 種、ゾウムシ科は 1100 種、カミキリムシ科は 900 種、ハムシ科は 800 種、コメツキムシ科も 800 種という大所帯である。カブトムシが属するコガネムシ科は 450 種、タマムシ科は 240 種、クワガタ科は 40 種となっている。このほかにも甲虫にはたくさんの科がある。ホタル科、ゲンゴロウ科、ハネカクシ科(これはメジャーではないがなんと 2260 種の大きな科である)、他にもまだまだある。なにしろ、これらすべてを含めて甲虫目には 130 の科があり、含まれる種は全部で 10000 を超えるのだ(日本だけで!)。甲虫は昆虫の中でも最大のグループなのである。この地球上で最も繁栄しているのは甲虫たちであり、最も影響を及ぼしている種は人間である。



実物大

マクガタテントウムシ 幕形天道虫  
(テントウムシ科) 体長 3.2 mm  
学名 *Coccinula crotchi*



幔幕(まんまく)